

対話での解決が平和への道

被爆者の八幡さん・広島

83歳で英語学び証言

「対話の糸口を見つけて解決することが平和への道」。広島市の「被爆体験証言者」として活動する八幡照子さん(88)＝広島県府中町＝は、83歳で英語を学び始め、外国人観光客らにも直接原爆の恐ろしさを伝えている。広島への原爆投下から80年。国際情勢が緊迫する中、核戦争への警鐘を鳴らし、核兵器廃絶を願う。

八幡さんは8歳の時、爆心地から約2・5kmの自宅裏庭で被爆した。「空一面が巨大な蛍光灯のようにピカッと青白く光った」。地面に伏せようと思った瞬間に意識を失い、気が付くところから離れた玄関まで吹き飛ばされていた。額から出血し、傷痕は今も残る。

当時、自宅にいた家族8人は全員無事だったが、新たな爆弾が落ちたら助からないと思った母親は「みんなで死のう、みんな一緒よ!」と叫び、押し入れから出した布団で家族を包んだ。「布団をかぶった時の家族の温かさや絆を今

も忘れない」。原爆と言えは一番に思い出す場面だという。

その後、避難した山で放射性微粒子やすずなどを食べた「黒い雨」を浴び、自宅近くまで戻る際に、髪が逆立ち、焼けた腕の皮膚を指先でぶら下げて逃げる人々と遭遇した。「まるで幽霊の行列のようだった」と振り返った。

通学していた己斐国民学校(現己斐小)は救護所となっており、被爆3日後にはがの手当のため訪れると、教室や廊下で大やけどをした人々がぎっしり横たわっていた。校庭では犠牲者の火葬が行われていた。「吹き上がる煙は異

臭で、校舎全体を包んでいた」

つらい話を思い出したくなかつたことなどから、長年、被爆体験を話してこなかった八幡さん。転機となったのは、「めつたにできることではない」と参加を決めた、ほかの被爆者と世界各国を船で巡りながら被爆証言を行うNGO主催の取り組みだった。その

時に、通訳を介しては「自分の言葉で、残酷なしみを直接英語で伝えたいと強く思った」と。

2019年に被爆体験者になった八幡さんは、だった英語での証言をはじめ、83歳から英語教室に始めた。先生に証言を語ってもらい一生懸命覚えた。日が愛嬌生みだいに寝ても練習した」と笑って返った。

「皆さんの愛する人はすが。守りたいものは何か」。八幡さんは証言する大切なものを思い起こし、いという思いから、ズい掛けている。「家族をだいたいという思いを抱き、80年間だった」。八幡さん「一日でも長く、力の限り被爆証言をしていきなう方を決めた」。



小学生らに講話する八幡照子さん＝7月1日、広島市中区

